

あしひきの 山の木末の 寄生木取りて

挿頭しつらくは 千年寿くとそ

大伴家持(巻十八・四一三六)

年があらたまると不思議なすがしさを感ずる。

しかし、こうした感

覚は曆が用いられる以前はなかったと想像され、連綿と続く日々に過ぎないある一日が曆の概念によって意味付けられ、そこを区切りとして何かが劇的に変化したように感じられることがとても面白いと思います。時間を認識したり数えたりする

のは人間特有のことだそうで、曆は約6000年前から使われ始めたといわれています。

この歌は750(天

平勝宝2)年1月2日に越中国庁で催された宴席で国守だった大伴家持が詠んだ歌です。当時すでに中国から入ってきていた曆を活用し、各地の国庁において宮中と同じ日程で同じ行事が催行されていたといえます。なかで

やまと
万葉がたり

この歌でも、ヤドリギを山から折り取ってきて髪に挿すと表現されており、それがヤドリギの強い生命力を人間の身体に寄りつかせるための呪的な行為であったことがわかります。千年もの長寿を祈るの極端ですが、それほどめでたいことを表現したかっただとみられます。

も新年の饗宴は重要で、国庁に郡司たちを招き、天皇に倣って新年を祝う行事を行うことは、国守の大切な務めであったようです。

歌に詠まれた「寄生

木」とはいわゆるヤドリギのことで、ホヨヤトビツタとも呼ばれます。ヤドリギとはもと寄生植物全般を指す名ですが、固有の品種名として用いられる

種名としても用いられます。落葉高木の枝や幹に寄生する常緑低木で、冬になりすっきり葉を落とした高い木の上につやつやで肉厚の緑の葉と黄色い実がひときわ目立ちます。その不思議な様子から、とくに生命力の強い植物として信仰の対象ともされました。日本だけでなく、ヨーロッパでも古代から尊重されており、現代でもクリスマスにヤドリギを飾る風習が一部の地域に残っています。

【訳】あしひきの山の梢の寄生木をとって髪に挿すのは、千年の寿を祈ってのことよ。

(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 原則、隔週掲載

夜を寒み

朝戸を開き

出で見れば

庭もはだらに み雪降りたり

作者未詳(巻十・三三二八)

よつとしたようです。これらの歌からは、雪や霰を愛でる古代の人の一瞬の心の動きが伝わってくるように思われます。

宮崎県で生まれ育った私にとって奈良の冬は寒く、この季節は布団から出るのに一苦労します。

この歌でも、作者は前の晩からの寒さに予感を覚えつつ、朝起きて戸を開けてみたら、庭にまだら状に雪が積もっていた、という体験をしたようです。

朝、目を覚ましたとき、小鳥のさえずりが聞こえてきたら、寝ほけつつもああ晴れているなと感じますし、遠くを走る電車や自動車の音が近くに感じられるときは、今日は曇りだなとわかります。そしていつかまた頬に独

特の冷気を感じたら、ああ今日は雪か、と思います。

やまと
万葉がたり

いものと認識されていたことによるとみられます。この歌がどこで詠まれたかは不明ですが、雪があまり積もらず厄介者とはみなされていかなかった地域であり、「一庭」が詠まれていることから、平城京内の邸宅だったのではと考えます。

「万葉集」巻十は、作者も作歌年も不明の歌々のうち季節に関わりありとみなされた歌を四季に、それをさらに雑歌と相聞歌に分類しています。春の雑歌、春の相聞、夏歌といった具合です。

【訳】夜が寒いので、朝の戸を開けて出ると、庭面にまだらに御雪が降っていた。

この歌は冬の雑歌に分類されていて、同じ「夜が寒いので、朝の戸を開けて出ると、庭面にまだらに御雪が降っていた。」という歌もみられます。この歌は冬の雑歌に分類されていて、同じ「夜が寒いので、朝の戸を開けて出ると、庭面にまだらに御雪が降っていた。」という歌もみられます。

登校中に霜柱をわざと踏んで歩いてみたり、薄い氷を持ち上げて朝日に透かして見たり、南国ながらそれなりに寒かった子どもの頃の冬の朝の楽しみを思い出しました。

(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか)

|| 原則、隔週掲載